

地域自然情報研究会 議事録

5月15日(月) 流域環境ベースマップの考え方

話題提供者 逸見一郎 (株)地域環境計画取締役副社長/GCN 副理事長

場所 神田学士会館 309 会議室

第1部 事例や研究の紹介(約1時間)

第2部 流域環境ベースマップについてディスカッション(約1時間)

第1部 事例や研究の紹介

(参加者の中で環境ベースマップ普及のために GIS を仕事で使っている人は5人以上いた)

‘90以降、環境基準にかかる条例や法律ができ始めた。法律に関して日本はヨーロッパより遅れていたが、公共事業や行政で使うようになってきた。

RDBに関して、例えば農大生が知らない等、あまり普及していない感がある。実態として生物多様性は減少している。身近な生物がいなくなっており、生態系が崩壊の危機に瀕している。農業等、人間にも大きく関わっている。土地利用政策のあり方に原因がある。

景観政策的アプローチが欧米諸国ではなされてきているが、日本では、ランド(土地特性)デザインが開発されていない。

GISと地図の違いとは、GISはシミュレーションができること等もあるが意思決定しやすいという特徴がある。

例えばカタクリのポテンシャルハビタットマップ(生育適地図)のように、GISを使って点情報を面に変えることにより様々な意思決定に使える。図示することは解析することである。

—ここより本題—

河川の流域を考える。水は1つにつながっている。

パワーポイントで事例紹介

- 環境類型区分国
- 地形と植生図を重ね合わせたマップ
- 地理学会 HP

一級水系、地質図(GIS化しただけ)だが、様々な地図が揃っている

- 国土交通省

河川環境情報図を整理中、現在は目録だけでまだ図化したものが揃っていない

つながりを意識する上で流域を考えることは重要である。どのようなマップを作っていけばよいかディスカッションしたい。